

# *JSI Newsletter*

## 創刊のことば

日本免疫学会会長 菊地 浩吉

以前より「日本免疫学会会員」のinteractionを促進し、活性化する接着分子ないしサイトカインのようなものがあればいいな、と考えていた。このたび、日本免疫学会の「International Immunology」が希望者購読となったのをきっかけに「JSI Newsletter」の発行が急速に実現したことは、たいへん喜ばしい次第である。これはひとえに理事会の先見的な方針、会員の方々のご支持によるもので、日本免疫学会の積極的な姿勢を物語るものであろう。

理事会では編集委員に高津聖志（委員長、「International Immunology」編集委員）、笹月健彦（国際交流幹事、IUIS理事）、熊谷勝男（第23回学術集会会長）、村松 繁（庶務幹事）の4氏を委託した。

発行に先立って、私は委員の方々に、自由に、存分に腕をふるっていただきたいとお願いした。ただ、高津委員長には、ほんのちょっとだけ希望というか、期待というか、次のようなことをつぶやいた。「会員への連絡事項ばかりだけでなく、国際学会との連絡、研究の進歩についての最新の情報も欲しいな。読んで楽しくなければならぬし、それから、この会報が若い会員が勝手な熱を吹ける場であってもいいな。たとえば、新しい発見とか、アイデア、仮説、免疫学会への文句とか…」。

〈自由に！〉などと旨いことを言いながら、そしてまたページ数の限られていることを知りながら、自分では小さな声でささやいたつもりではあっても、同時に余計な注文を付けたことを反省している。

しかし、できあがったこの創刊号は、いろいろな制限はあるにもかかわらず、無味乾燥な、単なる広報誌ではなく、さまざまな可能性を感じさせる立派なものであることをお認めいただけたと思う。この会報は、4千数百の会員の直接的な相互作用の媒介となり、巨大化した日本免疫学会の風通しをよくするものとなるに違いない。委員の方々のご努力を高く評価したいと思う。

折しもIUISの機関誌としての「The Immunologist」が発刊されたが、ボリュームはともかく、実質的な質の上ではこれにけっして負けないものであり、日本免疫学会会員の向上に役立つものになることは疑いない。

ただし、Interleukinがあっても、細胞にReceptorがなければSignalは伝わらない。どうかReceptorのほうも研ぎすましていただきたいと思う。さらに、我が「Newsletter」が、会員の方々のReceptorをも、induceし、本学会の機関誌「International Immunology」とともに、日本の免疫学が世界をリードするようになる起爆剤となることを期待したい。

## 学術集会開催にあたって

第23回日本免疫学会学術集会会長

熊谷 勝男

1982年（昭和57年）以来11年ぶりに日本免疫学会の学術集会を仙台にお迎えすることになった。東北大学各学部に属する免疫学会員を中心に演題募集の作業は終わり、現在（6月30日）、募集演題が続々と手元に届いているところである。

さて、今年からこの日本免疫学会の会報が発行されることになり、今年度の学術集会会長として原稿を依頼された。学術集会会長としては、学会の在り方に対する考えや、実際に、それをどのように具体化しているかなどを記す必要があるかと思うが、間もなく11月の学術集会で、その答えがそのまま出ることであり、あまり偉そうなことは言えない。

ただ、個人的にも考え、また、運営委員会でも「学術集会（いわゆる学会）」はどのようにあるべきか。あるいは、学会には果たして〈理想の型〉があるのかということなどについてはかなり論議された。結論はどうも、昔から行われているオーソドックスな型がもっとも有効な学会の型ではないかということに収まった。

つまり、まず、できるだけ十分な時間が与えられ、よく整理された内容を話す演者の発表があることによって、聴衆もよく理解でき、質疑もたくさん生まれる。司会者はこれらの重要な点に焦点を当て、実りある討論を引き出すという姿である。さら

に、発表会場の外にも十分な交流の場があって、討論はそこまで及ぶことが望ましいわけである。ともかく、学会出席が、そのまま明日の研究の糧になる学会になってほしいと思う。

近年の日本免疫学会学術集会は演題数が1,000題にも及ぶ大会になりつつあり、そのこと自体、日本免疫学会にとっては喜ばしいことである。しかし、そのように十分に討論が可能で、会員相互の交流が濃い集会をもつ時間的、空間的余裕があるかどうかということが切実な問題になっている。昨年名古屋での「第22回学術集会」から始められたポスターセッションも、それを可能にしようとして企画された、実質的には日本免疫学会にとって初めての試みであり、免疫学会運営の一つの方向性を示したものとして評価されている。今年もこの形式を踏襲させていただくことになった。

一方、演題が多くなり、会場が多数にまたがるようになればなるほど、出席できる分野が限られ、「免疫学の進歩」の全体像がつかみにくくなることも事実である。それを補うために、特にこれから免疫学の火中に自らを投じようとする若い方々のためには、先見性をもったり、特定の分野の進歩を伝えたりする、そんなシンポジウムを企画する必要もあるのではないかなどと考える。

ともあれ、できるだけ多くの会員の方々が来仙されて、「みちのく」の免疫学会を盛り上げていただきたい。

編集幹事の方から、学術集会の内容だけではなく「第23回学会開催の地・みちのく仙台」についてなにかガイドというか、お国自慢をお願いできればとのご依頼が併せてあった。個人的には、訪れたすべての会員の方々のお一人お一人をご案内し、秋のみちのくを満喫され、美酒に酔い、美味を存分に味わっていただきたいのだがそれも叶わず、その気持ちを十分にこめてほんの少しだけ付け加えたいと思う。

仙台は美酒、美味のお国柄である。美酒は、「浦霞」「一の蔵」「鳳山」「竹に雀」「天賞」「勝山」「志ら梅」「千松島」「雪の松島」等々の地酒。もちろん秋田や岩手の銘酒も揃っており、「み



ちのく地酒巡り」が楽しめる。

美酒とくれば肴。時季的にはちょっと外れるが夏はなんととっても三陸の「ホヤ」にとどめをさす。冬は「牡蛎」。生でよし、焼いても鍋でもよし。また、山海の珍味にはことかかないが、さかなに関しては、日本海側の小ぶりのさかなに対して、太平洋側の仙台は、むしろ大ぶりの生きのよ良さかなをご賞味いただきたい。米がまた美味しい。これまでは「ささ錦」が圧倒的に名前が知られていたが、これからは「ひとめぼれ」。

呑んで食べてというだけでも結構だが、せっかくだから温泉にゆっくりつかって、東の間、日頃の研究の疲れを癒していただきたい。「秋保（あきう）」「遠刈田（とうがった）」「作並（さくなみ）」「鳴子（なるこ）」「川渡（かわたぎ）」「鬼首（おにこうべ）」「湯の浜」「湯の倉」「温湯（ぬるゆ）」等々。湯質が千差万別のこうした温泉にも足を延ばしていただきたい。

景勝の地はもちろん海は松島であるが、蔵王の山々も近い。短い滞在ではご無理だろうが、八幡平から十和田湖まで一度は訪れていただいて、世界の紅葉と紺碧の湖水に息を飲み、奥入瀬の溪流にたたずみ、東北の自然も楽しんでいただきたい。

東北には歴史がないとお考えの方もいらっしゃるが、同じ「伊達の国」に属する「平泉」などにもぜひ一度は訪れていただきたい。

私自身、山猿の中学時代に、まだ、ほとんど何の整備もされていなかった「中尊寺」と「毛越寺」を初めて訪れ、西暦1124年以來の歴史を経た金色堂の前に肝をつぶしてたちすくんだことを昨日のこのように思いだす。その数年後に、金色堂の「須弥壇」の下に藤原清衡、基衡、秀衡三代の遺体と泰衡の頭部のミイラが現存するというを知り、これまた肝をつぶした。平泉は新幹線も止らぬ小さな駅だが、ぜひ一度は訪れて、東北の地の歴史とその栄華を知っていただきたい。

しかし、もっともっとそれ以上に、自然の豊饒な東北と仙台は、近年、その自然と調和する学術と産業の進展が著しく、いままさに、21世紀の日本の、そして世界の文化の中心として羽ばたこうとしている土地であることにご期待いただきたいと思う。

## 免疫学会事始め

日本免疫学会庶務幹事 村松 繁

早いもので、庶務幹事役をお引き受けしてから9年近くになる。前任者の花岡正男先生は、本学会の設立準備段階を含めると14年以上もこの役を務められ、しかもその間には総務として国際学会を取り仕切られた。それに比べれば、私などとやかく言う資格はないのかもしれないが、年とともに会員数も増加し、仕事も複雑になって増える一方なので、正直に「疲れました」と言ってもお許しいただけるものと思う。10年が限度だと考えているので、1995年にはどなたかにバトンをお渡ししたい。

「Newsletter」の創刊というおめでたいときに、弱音を吐くのが私の本意ではない。ここで述べたいのは、なぜ初代庶務幹事が花岡先生であり、次が村松であるのかということの次第である。それを説明するには、日本免疫学会設立の経過を振り返らなければならない。おそらく1975年頃以後の入会者の方はよくご存じないだろうし、とくに若い人にとってはまったく未知のことであろうと思われるので、この機会を借りて述べておきたい。

極論すれば、1960年以前には、現在で言うところの免疫学は存在していなかった。ワクチンと抗原抗体反応、それに伴う生体反応を研究課題とする血清学が免疫学と同義語であり、化学的には細菌学の、



組織学的には病理学と解剖学の一分野にしか過ぎなかったのである。

1960年といえばBurnetとMedawarがノーベル賞を受賞した年であり、私はそれ以前を免疫学の第一期、それ以後を第二期と考えている。その当否はさておき、第二期免疫学の勃興は、当時の多方面にわたる中堅や若手研究者に強い刺激を与え、わが国においても、新しい免疫学の研究会をつくらうという機運が盛り上がってきた。

1965年頃には、補体の研究会（この研究会は現在でも続いている）以外は全国的な規模の研究会はなかったが、1966年になって、近い将来に免疫学会に発展すべき母体として、大阪大学関係者を中心にして「免疫化学研究会」が、京都大学関係者を中心として「免疫生物学研究会」が発足した。両研究会とも、1967年に第1回のシンポジウムを開き、それぞれ盛会であった。2回目からは両研究会は連携し、1日目から2日目の午前にかけて化学の、その日の午後から3日目にかけて生物学のシンポジウムが行われた。

ちょうどその頃、Toronto大学のCinader教授が国際免疫学会連合（IUIS）設立を諸国に呼びかけられ、IUISは1969年に12か国をメンバーとして発足した。これに呼応して、われわれもかなり綿密な準備をし、1970年11月の名古屋での「第4回シンポジウム」のさいに「日本免疫学会」の設立が決定され、直ちにIUISに加盟した。事務局は京大ウイルス研の花岡先生のもとに置かれ、会員募集と役員選挙が行われた。その結果、以下の役員が選ばれた。

会長：山村雄一

運営委員：天野恒久、北川正保、西岡久寿弥、

花岡正男、浜島義博、松橋 直、右田俊介、

三橋 進、村松 繁、山本 正、吉田孝人

監事：牛場大蔵、武谷健二

庶務幹事：花岡正男

会計幹事：北川正保

一方、会員数は、1971年度で約600名、翌年には約1,000名となり、年会費は1,500円、入会金は500円という安さであった。

第1回の学術集会は、1971年11月30日から3日間、大阪中ノ島で開かれた。演題数は64題、一演題30分（口演20分、質疑10分）と贅沢に時間をとり、会場

## 第1回日本免疫学会総会記録

昭和46年11月30日、12月1、2日 大阪  
 世話人 花岡 正男・村松 繁

抗原・化学	(1-14)	1
細胞	(15-22)	40
細胞協力反応	(23-31)	64
抗体	(32-37)	81
抗体産生変動	(38-45)	110
細胞表面抗原	(47, 48)	137
細胞性免疫	(49-50)	143
感染と免疫	(60-64)	174
第1回国際免疫学会に出席して		189
免疫グロブリンについての用語		213
英文総目録		219

### ▲第1回日本免疫学会総会記録・扉

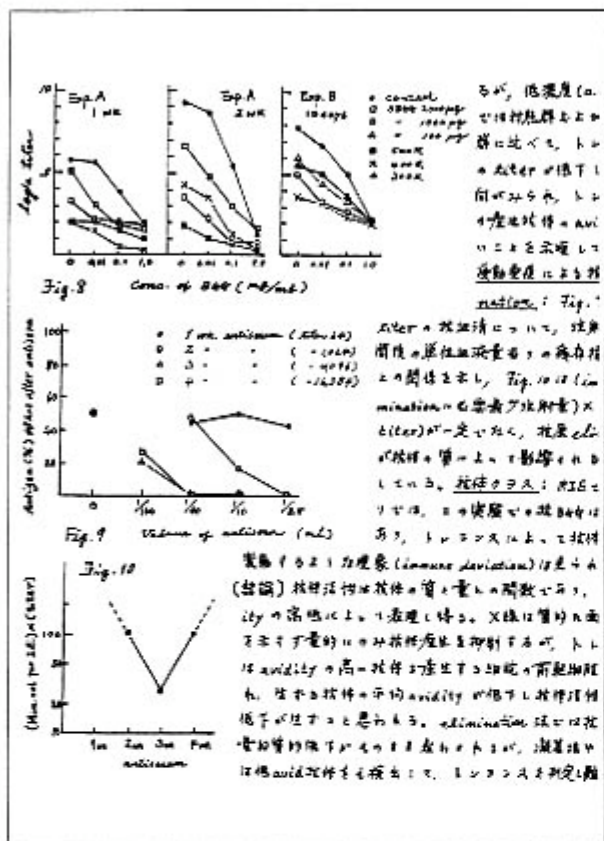
も一つ（一部で二会場）だったので、約300人の参加者で熱気にあふれ、廊下で雑談している参加者など事実上皆無であった。

このときの世話人は花岡先生と私であったが、会場が阪大のすぐ近くだったこともあって、会場の下準備はほとんど北川先生がして下さった。当時（その後も）の免疫学会で、例えとしては適切ではないかも知れないが、かつての自民党でいえば、総理・総裁を山村先生、内閣官房長官を花岡先生とすれば、北川先生はさしずめ党幹事長であったといえよう。北川先生は私たちにとって大恩人である。免疫学と癌学の組織発展のために、文字どおり昼夜をおかず、尽力された。ところが、1977年の秋、ある研究班の東京での会議で発言中に脳出血で倒れ、50歳の若さで急逝され、私たちは大きな衝撃を受けた。

さて、話を元に戻そう。

1984年の秋頃、花岡先生からお話があって、結

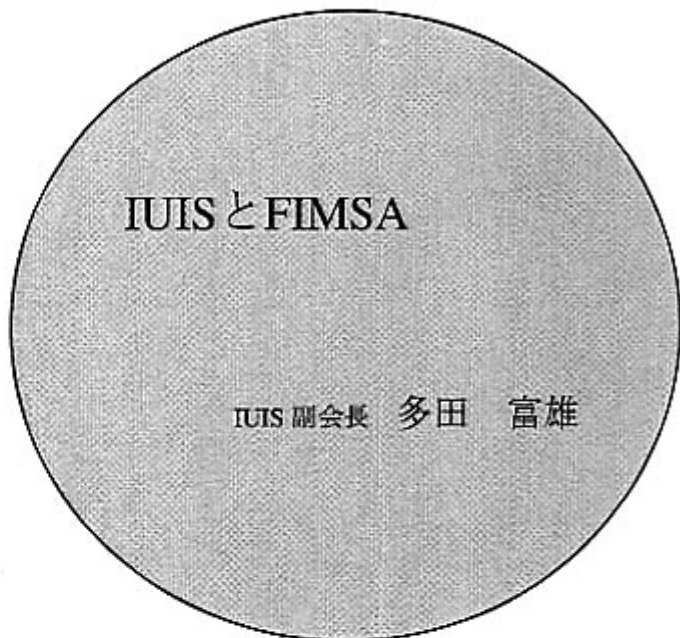




▲第1回日本免疫学会記録・抄録(部分)  
ほとんどの濃度が手書きであった。

局、1985年以降の庶務幹事を引き受けることになってしまった。決心するまでには時間とスペースの不足、その上、能力があるかどうかの自信もないので、ずいぶんとためらった。しかし、免疫生物学研究会時代に小さいながらも事務局を担当したこともあり、免疫学会設立時の最若役員でもあったし、その後も学会運営のお手伝いをしてきたことでもあり、京大内だから引き継ぎも比較的簡単であることなどを考えて、最終的には、進んでお引き受けしようという気になった。それ以後、ときどき研究室の人たちにもお手伝いいただきながら、私とパートの女性一人とでなんとか仕事をこなしている。

過ぎ去ったことは、何かの形に書きとめておかないと、いつのまにか忘却の歴史の中に埋没してしまう。ここに記したことが、「免疫学会事始め」に関する簡単な記録として、会員の方々に役立てば幸いである。



国際免疫学会連合 (IUIS) 主催の国際会議は、3年に一度、開催されており、第8回国際会議は、1992年8月ハンガリーのブダペストで開催され、6,000人以上の参加者を集め、好評のうちに終了した。

この国際会議にあわせ、IUISのNewsletter『The Immunologists』が発行され、会議参加者に配付された。IUISでは、このNewsletterの特別価格(年間39USD)での購読を募集している。また『The Immunologists』は、現在第3号まで発行されており、バックナンバーも揃うとのことである。日本免疫学会会員であることを明記して、出版元(Hogrefe & Huber Publishers)に申し込めば、上記の特別価格で年間購読することができる。

さて、会議中、IUIS理事会が開催され、以下の今期の役員も選出され3年間の任期を務めることになった。

- 会長: H. Metzger (USA)
- 副会長: T. Tada (Japan)
- 庶務: K. James (UK)
- 会計: P. Nieuwenhuis (Netherlands)
- 理事: R. Arnon (Israel)
- P. A. Cazenave (France)
- W. Chen (China)
- M. DeSousa (Portugal)
- G. Doria (Italy)



R. Gisler (Switzerland)  
 J. Ivanyi (UK)  
 J. Kalden (Germany)  
 K. L. Knight (USA)  
 N. K. Mehra (India)  
 R. G. Miller (Canada)  
 Gy. G. Petranyi (Hungary)  
 R. Petrov (Russia)  
 T. Sasazuki (Japan)  
 G. R. Shellarn (Australia)  
 J. Sterzl (Czechoslovakia)

次回の国際学会は、1995年7月、組織委員長の W. E. Paul (NIH, USA) のもと、サンフランシスコで開催の予定であり、また次々回の国際会議は1998年にインドのニューデリーで開催されることになっている。

さてIUISの下部組織としてすでに活動しているヨーロッパのEFISの他に、FAIS(アフリカ)、ANAI(ラテン・アメリカ)、FIMSA(アジア・オセアニア)の免疫学会連合が設立され、1992年より、これら4つのブロック毎に、各国間の共同研究・人材の交流などを目的に連合会議を開催することになり、活動が期待されている。

FIMSAは、1998年の国際会議主催国であるインドが中心になって各国に呼びかけ、1992年2月、ニューデリーで連合準備会が開かれ、実質的な活動に入った。

参加国は、インドの他、イスラエル、タイ、中国、台湾、オーストラリア、日本で、日本からは多田が参加し、2日間にわたってFIMSAの構成と規約についての検討が行われた。そこで決定されたFIMSAの規約は、既に日本免疫学会理事会において批准されている。

閉会に際して、この準備会を第1回理事会とし、第2回以降、毎年開催することを定め、またメンバーについては、現在、IUISのMember Societyとして認められているものがメンバーとなり、また現在、審議中のNational Societyがオブザーバーとして参加することが採択された。FIMSAの役員は以下の通りである。

会 長：G. P. Talwar (India)  
 副会長：R. Scollay (Australia)  
           W. F. Chen (China)  
 秘 書：N. K. Mehra (India)  
 会 計：C. M. Chang (China)

理 事：T. Tada (Japan)  
           S. Sirisinha (Thailand)  
           M. Choi (Korea)

FIMSAの第2回理事会は1992年のブダペストでの第8回IUISの理事会の後に、また第3回は1993年チリ・サンチャゴにおけるラテン・アメリカ免疫学会連合の会議に際して行われたが、まだ具体的な活動はなされていない。現在、それぞれのメンバー国の学会の寄金によって事務組織が作られ、日本免疫学会は1万USドルを寄金した。第1回のFIMSA congressは、現在、オーストラリア免疫学会が名乗りをあげており、1995年に開催する計画である。

いずれにしてもFIMSAは、こうして骨子ができ、やっとスタートラインに立ったばかりの状態である。このFIMSAが軌道にのり、各国間の共同研究・人材の交流など幅広い活動をすすめていくことが免疫学全体の発展につながるものと考えられ、日本としても応分の寄与をしてゆくことが望まれている(談)。

## 『International Immunology』 の現在、そして未来

『International Immunology』編集委員長

多田 富雄

日本免疫学会が1989年よりOxford University Press (OUP) と共同で発行している『International Immunology』も、今年で5年目を迎える。当初、隔月で発行され、1990年から月刊誌となり、現



在では、国内のみならず国外にも1,000名近くの購読者をもつまでに発展した。1991年より Medline、Index Medicus、そしてExcerpta Medicaと citation journal のすべてに登録されるようにもなった。

また、1992年の当雑誌への投稿状況は、総投稿数290編にのぼる。その内訳は、ヨーロッパ46%、アメリカ33%、日本14%、そのほか7%となっており、審査を通るのはそのうち60%弱と、国際誌として高いスタンダードを持つまでに成長した。

このように雑誌としてはたいへん理想的な形で発展したが、すべてが順調であるというわけでもない。というのも、刊行のさいに定めた3,000円という年間購読費では、雑誌の郵送費にも満たず、実際の製作費としては完全な赤字の状態となり、OUPにたいへんな累積赤字をもたらす結果となった。

この最大の課題点を解決すべく、日本免疫学会理事会では2年余にわたって検討し、すでに『International Immunology』誌上でお知らせしているように1994年度の契約更新の時点から購読方法を全面的に変更することになった。その経緯、決定の詳細については『International Immunology』をご覧いただきたいが、ここでは要点のみ記す。

- ・『International Immunology』の全員購読の形態を改め、運営委員全員と購読を希望する会員のみが特別価格による購読をする形をとる。

- ・日本免疫学会会員の特別価格は、年間12冊、会員15,000円、学生会員7,500円とする。

来年度より編集委員の交代もあり、それを期にさらに充実させていただき、他の一流誌にひけをとらないような国際的に高い評価を維持し、発展させていただきたいと願うものである。

とにもかくにも『International Immunology』の誌面を活気づかせ、評価を高めさせるのは、当たり前なことだが編集委員の力ではない。それは、すべて読者の方々のサポートにはかならない。

一層のご理解とご協力を願う次第である (談)。

## 上手な Collaboration

大阪大学第3内科教授 岸本 忠三

最近の免疫学のトピックスは、何ととっても3つのX染色体関連免疫不全症の遺伝子解明であろう。SCIDはIL-2R $\gamma$ 鎖、高IgM症候群はCD40リーガンド、そしてBruton無 $\gamma$ グロブリン血症はBリンパ球特異tyrosine kinaseをそれぞれコードする遺伝子の変異であることが明らかとなった。

これらの発見をみていると、それぞれの分野の専門家間の共同研究がいかに大切かを教えてくれる。分子生物学者が遺伝子をクローニングすると、細胞遺伝学者がその染色体上の位置を決定し、その結果、すでにそこにマップされていた病気が浮かび上がり、臨床家からの患者材料のスムーズな提供が行われる。このようにして1つの発見が生まれる。

IL-2R $\gamma$ 鎖は日本で菅村らにより発見され、その遺伝子が単離された。しかし、病気との関連は日本で発見しえなかった。やはりエキスパート間の共同研究の重要性が浮かび上がる。これら遺伝子をリンパ球で消去したマウスの作製はRag-2ターゲットマウスを用いて共同研究が行われている。共同研究がスムーズに運び、そうして良い結果が生まれるためには、それぞれがその分野の第一人者であることが必要であろう。そうでないと一方が他方を吸収してしまう結果が往々にして起こり、それゆえ共同研究が長続きしなくなることもあれば、最初からのみこま



れることを恐れるあまり、自分だけの小さな砦だけを守って共同研究を拒否することも起こる。こういうことが日本での上手な共同研究を妨げる要因の一つとなっている。

1つの分野で秀でること、どんな小さなことでも世界で最初に見つけること、それが上手な共同研究を通して大きな成果を生むために必要なことである。すでに欧米で発見され、報告されている事象に関する研究は、それがいかに興味ある分子や現象であっても、また、どれほど詳細に解析しても誰も共同研究をしてほしいとは思わないであろう。

免疫系の認識と調節に重要な役割を担う分子をコードする遺伝子を消去した knock out マウスが世界中で次々と作製され、近い将来、ほぼその全部が出そろおうと思われる。これらのマウスを用いて、あるいはこれらのマウスをうまく交配することによって、さらにそれらのマウスに適切な問かけをすることによって、次々と新しい情報が生まれてくるであろう。何もかも1つのグループでやることは不可能であり、ここにまた上手な共同研究が大きな実を結ばせることになる。

“膜から核へ”、サイトカインからレセプターの dimerization、そして tyrosine kinase の活性化から SOS-GRB2 をアダプターとして Ras-MAPキナーゼカスケードへ、そして転写因子の活性化へとつながるシグナル伝達の道筋の概要とそこに登場する主要なプレーヤーはほぼすべて明かとなった。それぞれの細胞、それぞれの組織における発生、増殖、分化、そしてユニークな生命現象の発現は、これらプレーヤーの選択、組み合わせにより表出されてくる。

“Hundreds of Players” を1つの研究グループで品揃えすることは不可能である。ここでも上手な共同研究が大きな果実を実らせることになる。

上手な共同研究は、双方にメリットがなければ成立しない。“Give and Take” の “Giveできるもの” を持たなければならない。地理的に遠く離れ、欧米の研究者と接触する機会が極度に少ないという日本のハンディキャップを乗り越えて “上手な共同研究” を行うために、独自のユニークな、しかも時代を先取りした、国際的に通じる “もの” を持つということに努力しなければならない。それが日本の免疫学をもう一段発展させる道であると思われる。

【JSI Newsletter・創刊号】をお届けします。

ささやかながら編集に携わったものとしては、とにかくお読みいただきたいと願うばかりです。

本ニュースレターは、基本的には事務連絡をまとめたものと考えておりますが、ただ単に一方的なお知らせだけでなく、会員相互の情報交換の場、あるいは交流の場、討論の場にしていただければと思っております。

そのためには、なんといっても会員の方々、お一人お一人のご参加が不可欠であると考えます。本紙に対するご意見・ご要望はもとより、ふさわしい企画、有用な情報など、ぜひお寄せいただきたいと考えます。それらを反映したく躍動感の感じられる紙面にできたらと考えております。

最後になりましたが、本紙発行のために、お時間を割いていただいた他の編集委員の先生方、またご多忙にもかかわらず素晴らしい原稿をご執筆いただいた先生方に、改めて深謝いたします（高津）。

発行 日本免疫学会 606 京都市左京区北白川追分町 京都大学理学部動物学教室内

編集 高津聖志（東大・医科研）／笹月健彦（九大・生医研）／熊谷勝男（東北大・歯）／村松 繁（京大・理）

1993年10月1日発行 Printed in Japan